

2012年12月14日(金) 13:30-15:30 広島市河内公民館

『最期までその人らしさを失わない生活を！—ホーム・ホスピスの可能性に賭けて…—』

今日は、私どもの事業ホーム・ホスピス『まろんの家』の取組みについてご紹介させていただき時間をいただきました。

まず、『まろんの家』のまろんの色のイメージは、大地イコール生命の根源・母・安定感を表します。そして、『まろんの家』は、ひとりで生活することが難しくなったひとりや、その家族を支える「第二の我が家」です。

【理念】

一般社団法人フツフルは、医療機関や自治体、地域住民との協力により、最期までその人らしく生活するためのサポートの質の向上と、地域社会への啓蒙活動を図り、広く公益に貢献することを目的とする事業を行います。高齢者や在宅療養患者、障がいを持つ人たちが安心して過ごせるように、医療福祉に関するさまざまな情報の収集とサポートに努めます。弊社は、「あなたらしく生活する」ためのエスコート・ランナー(伴走者)であり続けるという理念を持っています。

【『まろんの家』のボランティア犬たち】

家には、時々ボランティアの犬たちがやってきます。先日お泊りいただいた90代男性の方も、思いがけないこの犬たちの訪問に、思わず微笑みかけるシーンが見られました。犬も『まろんの家』の家族の役割を果たしています。

本日の講演のキーワードは、ホーム・ホスピス、自分らしく生きるです。

【ホスピスって なぁに?】

もともとヨーロッパで巡礼者など、旅に疲

れた人たちや、病人を休ませる会や宿泊施設をさしていました。そして、看護をする人の無私の献身や歓待を、ホスピタリティと呼びます。つまり、ホスピスとは、そのようなものの考え方を言います。この「ホスピス」という言葉が語源になって「ホスピタル」「ホテル」という言葉に変わっています。

【現在の日本のホスピスは】

現在の日本のホスピスには、緩和ケア病棟と在宅ホスピスの2つがあります。

緩和ケア(ホスピス)病棟と呼ばれているのが、ホスピスとみられるのが一般的です。そして限られた時間を、その人らしく過ごしていただく病棟と理解されています。このホスピスには、がんの患者さんとエイズ患者さんの受け入れをるところ、とされていますが、実際には、がんの患者さんがほとんどと聞いています。

今“ホスピスをすべての人に開かれたものに”と福岡県から全国に向け署名活動が始まっています。私もその運動の発起人に加えていただいています。これは「緩和ケア病棟に、がん・エイズの患者さん以外でも受け入れをして欲しい」という要望書を厚生労働大臣に提出しようとするものです。ホスピスは緩和ケア病棟だけではありません。患者さんの自宅で残された時間をそのひとらしく過ごそうとするところにもホスピスはあります。

【終の住処は どこがよいか?】

広島県では、「高齢期における 自分らしい暮らしをみんな支えあう」をテーマに高

高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、医療、介護、予防、住まい、生活支援サービスを切れ目なく提供する「地域包括ケアシステム」の構築を推進するため、広島県地域包括ケア推進センターが平成24年6月1日に設置されました。

在宅ホスピス（24時間連携して見守る）とは、自宅で、家族の支えのある中で、その人らしい生活を見守ることを言います。しかし、中には家族の支えの無い時もあります。その場合、その人（患者さん）自身のはっきりした意思（自宅で最期を迎えたい）が医療者などの支える人たちに伝えられていないと非常に難しいことがあります。ホーム・ホスピス『まろんの家』は、在宅ホスピスとして家族の支えが無い時、一軒のおうちで5～6人（共同生活：疑似家族）が生活することを、医療・介護のスタッフとボランティア、そして地域が連携してケアに取り組もうとするものです。

【理事4人の今までの活動】

広島市内の「最期まで その人らしい生活を考える」市民団体で10年以上活動してきた「ホスピス・ボランティア」です。看護師1名と介護員3名、この4人が、今までの活動から「大いなるおせっかい」に取り組もうとするものです。

【一般社団法人 フッフルの活動】

営利事業として『まろんの家』と訪問介護事業所「リトル・マロン」と、非営利事業（使命）として「地域へホスピスマインドを伝える（広める）！」があります。

【『まろんの家』からおすすめの本4冊】

利用者さんご家族には、是非読んで「どう生きるか」を考えていただくために、「平

穏死の10の条件」（長尾和宏著 ブックマン社）と、「私の生き方連絡ノート」（自分らしい「生き」「死に」を考える会編集）をおすすめしています。

また、これから「まろんの家」で働くスタッフには、「病院で死ぬのはもったいない」

（山崎章郎 / ニノ坂保喜 / 米澤慧編集 春秋社）を読んで、スタッフとしての心得を学んでもらいます。これは在宅医の立場で、過去のご経験（患者さんやご家族との関わり）から、コミュニティケア（地域包括ケア）の必要性を説かれ、それを実践してこられたことなどが書かれています。

『まろんの家』にご縁のあったすべての人たちには、ファイナンシャルプランナーの書いた「エンディングノート」（泉谷勝敏著）を、ご自身の生き方を考えていただくために用意しています。

『まろんの家』は、湯来町の白砂台^{しらさごだい}団地内にあります。さあ、あなたが今できることは何でしょう。

認知症の実母への尊属殺人を取り上げた映像を観た後に、意見交換しました。

（文責 栗山恵子）

